

緑と環境

代表理事 安立 一郎

2002年あけましておめでとうございます。人間環境活性化研究会（ハートの会）も8年目を迎え、役員、会員の努力と奉仕で活発に運営されていることを感謝いたしますとともにおよろこび申し上げます。

本年は緑のお話をいたしたいと思います。

自然には、土、水、大気は無機的自然と、植物や動物など生物体を構成する有機的自然があります。生物が生命を維持するためには、酸素とエネルギーが不可欠です。植物は光合成の力によって大気中から炭酸ガスを吸収して酸素を放出してくれます。また、木、草、藻、菌類などが持つ葉緑素のみが太陽からのエネルギーを捕捉することができます。これらの植物を動物が食し、その動物を肉食動物が食し、それぞれの生命エネルギーに変換して生命は維持され循環しております。

植物が太陽エネルギーを有機物として固定する一次生産量は、年間約2000億トンといわれます。その内、森林は約50%、海洋は20%、農耕地は10%、その他20%と推定されており、森林が地球最大の生産者ということになります。そして更に、森林、草、藻等の緑化植物は、水の保全、土の保全、気候の緩和、生物の保護、種の保全等多方面にわたり、重要な役割をはたしております。まさしく、森林植物は躍動する自然の共生、生命系社会そのものであります。

今日、経済優先の価値観の下、物質的豊かさを求め続ける人間活動は、生命の源である大気や水や土壌を汚染し、緑の森林を破壊する結果をもたらすことになりました。地球規模の問題でいえば、開発や木材の伐採による熱帯雨林の加速度的な消失、劣化が憂慮されております。また私たちの身近なまわりからは、きれいな水や昆虫、豊かな緑が失われつつあります。

しかし、科学技術の驚くべき発展に伴う利便性は、私たちの生活や産業活動のあらゆる分野に奥深く入り込み、もはや、これを取り除くことも手

放すこともほとんど不可能と云わざるを得ません。私たちの今なすべきことは、既存の技術を否定することなく、これを有効に活用する知恵を働かせることによって環境の浄化をはかること以外にはないのではないのでしょうか。生産と環境の調和を可能にする新しい技術の創生と体系への転換を図ることによって環境への負荷を今以上に大きくしないことが必要です。

日本では公害防止の技術は進んでいるが環境と調和した街づくりについての社会的技術システムは十分ではないと云われます。

自然、歴史、文化的な環境の保全や美的空間の創造など、人の生活を豊かにする環境づくりの一つに都市緑化があります。公園、広場、道路の緑化、埋め立てられた河川、削りとられた斜面を生かした緑化の推進の他、更に住宅に環境保全技術を取り入れる試みとしては、屋上緑化、ソーラシステムや雨水の循環技術があります。

都市の緑化は、景観の美化のみならず、大気汚染の浄化、無機、有機汚染物の分解、ヒートアイランド現象の緩和、窒素酸化物の分解、火災延焼防止、保健・休養の場の提供等の効果が期待されます。

2000年11月1日に開催されました第7回日韓国際環境賞表彰式に参加した際、来賓祝辞者の川口順子環境大臣（当会の第1回セミナー講師）と大韓民国特命全権大使崔相龍（チェサンヨン）（東京城西ロータリークラブの元・米山奨学生）のお二人にお目にかかり、お話をいたしました。21世紀の人類は、きれいな水と空気、緑の山野・都市と青い海、健康な動植物との共生の生態系の推進と平和な環境の実現を図るべきことを強調され、深く共鳴いたしました。

自然環境を都市の内外に確保し、開発と保全のバランスを保ち、経済社会、個人生活におけるエコロジックな要素を重視した環境ビジネスを次世代産業として育成することが重要な課題と考えます。

